

発刊10周年に寄せて

近藤 知子

作業科学研究 編集委員長

「作業科学研究」は、2007年に第1巻が発刊され、本巻で10巻目となります。日本における作業科学は、故佐藤剛先生が1995年に南カリフォルニア大学のFlorence Clark先生とRuth Zemke先生を招聘して作業科学セミナーと全国研修会を開いたことから歩みを始めました。当初セミナーは、この学問に惹かれる人が一つの教室に集う程度の小さなものでした。しかし、2006年には日本作業科学研究会が発足し、現在では200人を超える会員を擁しています。毎年学術集会が開催され、ニュースの発行、研修会の企画・実施、電子媒体を使った情報の周知などを行うようになりました。本誌もまた、日本作業科学研究会の発足の翌年から、研究会の機関誌として10年間毎年発刊され続けています。

現在、作業科学を冠する学術誌は、世界で本誌以外にはJournal of Occupational Scienceがあるだけです。つまり、世界の中で、母国語で作業科学に関する知識を読み書きできる場は非常に限られているということです。本誌は、日本語以外での投稿を認めてはいるものの、主に日本語を母国語とする研究者や読者を対象とするものであり、日本独自の社会的文脈や文化的文脈にそって、作業や作業的存在の知識を発信したり、獲得したり、論じたりするための場としての役割を担っていると考えております。また同時に、邦文と英文が併記されている講演録や各論文の英文抄録を通し、日本の動向を世界に伝える橋渡しにもなっています。

私は、昨年より本誌の編集長として着任しました。編集の仕事は私にとって初めてのものでしたが、日本における作業や作業的存在に関わる学術的知識の生産・発信・普及に携わりたいという思いが、編集長を引き受ける動機となりました。先にも触れましたが、日本の作業科学は、この20年間、日本独自のあり方で発展しております。その特徴のひとつに、作業科学研究会に所属して下さっている会員多さ、そして、作業科学の知識を実践に役立てようと意識されている作業療法士の方の多さが挙げられます。これまでの編集委員長および編集委員方々が作り上げてくださったスタイルを足がかりにしつつ、このような日本の独自性を背景に、本誌が何を求められているのか、何をなすべきなのかを、7名の編集委員とともに模索しながら進んでいきたいと考えております。

10周年の記念として、初代会長である宮前珠子氏と現会長である吉川ひろみ氏による作業科学の振り返りと未来への展望を載せております。宮前氏は世界の作業科学の動向を多角的に捉えつつ、日本の今後の方向性に対する見解を記して下さいました。また、吉川氏は作業科学が包含するものとその影響を、ご自身の振り返りの中から記されています。お二人は、本誌の創刊号でも、作業科学の可能性についての思いを語って下さっています（日本作業科学研究会のホームページから、閲覧していただくことができます）。二人の日本の作業科学のリーダーが、この10年間何を考え、そしてこれからの作業科学が何をなすべきだと考えてきたのか、是非読み比べて頂きたいと思います。

10周年を祝い、国際作業科学者協会(ISOS)、ヨーロッパ、カナダ、チリ、アメリカなどの世界の作業科学組織から祝辞をいただいております。それぞれの国・組織は、それぞれの歴史・社会状況・信念を反映しながら発展しています。作業と作業的存在のあり方は、国や文化を超えて重なり合う点があります。また、その重なり合う点を見据えるが故に見えてくる違いもあると考えます。自身の研究・臨床・生活の中にあられる価値観を理解するためには、目の前のことを見つめるとともに、自分を外から目を養う力も必要となるかもしれません。この機会を通し、多くの皆様に世界の作業科学の存在とその動きについて関心をもっていただければ幸いです。

本巻ではさらに、機関誌編集班のPeter Bontje氏ならびに青山真美氏による日本作業科学セミナー20年間の振り返り、本誌の10年間の振り返りを載せております。セミナーの振り返りでは、これまでのセミナーの開催地、開催年月日、実行委員長、テーマ、基調講演の題と講師の先生、演題数、参加者数等を掲載しております。また、本誌の振り返りでは、過去の論文数、論文のタイトル、キーワード、目的開催地、実行委員長、研究の種類、そこで用

いられている作業の視点等をまとめています。今後の作業科学の動向を見据えるために、また、作業科学研究の実施や論文執筆のためにお役立てください。

これに加え、通常巻と同様、前年度の作業科学セミナーのJeanne Jackson先生による基調講演を土台としたとJackson先生と小田原悦子先生の講演録とEric Asaba先生の特別講演録、また、2編の研究論文と2編の短報を載せております。今回のコラムは、作業療法アーティストのkoshikiさんです。

日本の作業科学が世界との交流を一層進めつつ次の10年に向けてさらなる発展を遂げ、これに際し、「作業科学研究」が作業科学発展のための学術的交流の場として、学術性を保ちつつも、多くの方々に興味を持っていただける雑誌となるよう努めて参ります。皆様方のご支援、ご協力をお願い申し上げます。